

《研究ノート》

南チュニジアのトゼール・オアシス

——ひとつの事例研究——

竹内啓一

わが国においては、オアシス集落に関する事例報告が、とくに

にサハラに関しては非常にすくなく、チュニジアのオアシスに関する報告は皆無である。もともと地中海地域の集落を研究して、それとの対照という観点から赴いたのであり、短期間のしかもアラビヤ語も理解しない者の報告であって、調査報告などと称しうるものではない。ただ、日本の学界に対して、一つの材料を提供しておくために、研究ノートとしてここに観察結果をまとめておく。ジェリド Djérid 地帯あるいはトゼール Tozeur オアシスにかぎったモノグラフィ研究は外国の学界においてもなされていないが、ジェリド地方、あるいはトゼールに関する言及は非常に多くの研究のなかにおいてなされている。この小論をまとめるのにさいして、この四半世紀ほどの間になされたこれらの研究には、大体すべて目を通したつもりで

ある。

二

チュニジア領サハラ Le Sahara Tunisien と呼ばれる地域は、
地体構造からみればサハラアトラスの東部分であるネメンチャ Nementcha、テベッサ Tebessa などの低い山地の南側に位置し、アルジェリアに続くショット(鹹湖)地帯の一部をなす低地(高度二〇〇メートルから海面下一五メートル)からなっている。ジェリドのオアシス群からジェルバ Djérba 島にいたるほぼ北緯三十四度の線で境すると、この南は年間降水量が九〇ミリ以下で、オアシス以外には植生も殆どなく、岩石沙漠または砂丘地帯の景観を呈している。⁽¹⁾

ここで問題としてとりあげる地帯は、このチュニジア・サハラの北縁のジェリド地帯である。年間平均降水量は百ミリ以下(トゼールで八九ミリ)であるが、オアシスの外部にも、貧弱ながらステップ状の植生が一般にみられ、この点では、まったくの沙漠にとりかこまれたネフザウア Neftaoua のオアシス群とはちがっている。地中海岸との地形的障害はさほどなくトゼールとネフタ Nefta のオアシスは、Thusuros, Aggasaï Zepre の名のもとに、古代ローマのアフリカ州の南限をなしていたし、キリスト教のさかんな地であった。⁽²⁾ ケントウリア地帯が現在航空写真で確認できるのはスファックス Sfax 周辺の平野までであるが、テベッサ山地には、一辺二〇から五〇米の方角状の石垣の区割のあとが見出され、これは、おそらくは十

二世紀頃までは利用されていたオリヴ耕地のあとであると考
えられている。この耕地は、おそらく、山地の雪だけ水を土壤
中に蓄えるという意味をもったテラス耕作のものであったと考
えられるが、現在でも、非灌漑耕地におけるオリヴ栽培の南
限は大体この附近で、ガフサ(Gafsa)の附近にみられるものが
それであると考えられる。地中海地域においては、よく言われ
るように、オリヴの分布が、最もよく農業地域としての「地
中海」の特色を示すという点でこのことはやはり注目に値す
る。

このようにして、ジェリド地帯は、歴史的にみても、また伝
統的農業にとつての自然条件という点からみても、「地中海」
のはてるところ、あるいはサハラのはじまるところという意味
をもつのであるが、国の大部分が「地中海」に属し、経済発展
の方向も、むしろ地中海地域という枠組みのなかで考えられる
ことの多い現在のチュニジアにおいては、また別の意味をもつ
ことになる。アルジェリア・サハラのオアシスと同様、ここは
ナツメヤシに基礎をおく農業地帯であり、チュニジアの農業の
中では、この特化傾向が著しい。ジェリドのオアシス群には、
チュニジアのナツメヤシの数の約半分(一、三八七、六〇〇
本)が集中している。ジェリドのエル・ウディアヌ(El Oudiane)
・オアシスから、燐鉱山のメトラウイ(Metlaoui)の町を
あいだにはさんで、わずかに六〇キロ東北のガフサにいくと、そ
こには、開放耕地で旱地農法と放牧とが同一の地縁社会集団
(集落)のなかで結びつき、かつ遊牧と定着農業とのあいだが

歴史的にみれば流動的であった「地中海」があるのである。ガ
フサの東南二〇キロのところエル・グエッタル El Guettar
のオアシスがあるが、これは十五世紀に居住が開始された新し
いオアシスであり、そこには、ジェリドにはないがサハラには
一般的であるフオガラ(fogara)が、おそらくはネフザウア・
オアシス群から導入されている。このようにしてジェリドのオ
アシス群は、現在のチュニジア領の農業景観のなかでは例外的
な、マグレブに古来から根をおろしている「定着的農村文明」
に属するのである。今世紀初頭、トゼールの行政官ベネ(Dé-
rol)が報告しているように、フランス人がここにやってきた
とき、彼らは、そこにすでに完備した灌漑・排水技術を見出し
たのであった。

以上なしたようなジェリド地帯の位置づけとの関連で、さら
に次の二つの問題に注目しておく必要がある。ひとつはいわゆる
デストゥール社会主義の中心をなす農業生産協同組合(Union
Coopérative de Production)をはじめとする農業改革(13)と
くに中部・南部のための土地改良機関(Office de Mise en
Valeur)や多角経営協同組合(Cooperative de Polyculture)
などの事業が、オアシスでは殆ど効果を示していないというこ
とである。農業生産協同組合の運動が、もともとオアシス地帯
に殆ど適用できないものであることは、(1)ヨーロッパ人による
農業用水の「かこいこみ」は、土地の「かこいこみ」のように
大規模におこなわれなかつた。したがって、オアシスにおけ
るコロンの農場は、ヨーロッパ人によって鑽井がほられた場合

にかきられることになった。⁽¹⁴⁾(2) コロンの土地もオアシスでは直接経営されることは殆どなく⁽¹⁵⁾、そこにおける農民は、北部における以上に新しい協同組合経営への意欲を欠いていた。(3) オアシス農業の投下労働量は通常考えられるよりもはるかに季節的変動が大きい。⁽¹⁶⁾これも、たとえコロンの土地が接収されても、生産協同組合化を困難にする条件となる。(4) 生産協同組合による土地の交換分合、機械力の導入などは開放耕地、あるいは大区割の樹園において効果を發揮するのであって、オアシス耕地においてはその効果は期待できない、等々の理由からも明らかである。チュニジアで事実上農業改革を云々できるのはメシエルダ低地 (Basse-Medjerda) とエンフイダイン (Enfidia) 地帯とに限られるのである。⁽¹⁷⁾

第二の問題点は、その生活様式からみて、アルジェリア・サハラとの関連が深かったジェルダ地帯が、国境によってアルジェリアと切り離されたことに関わることである。一九一三年の鉱山鉄道の開通、トラック交通の発達によるキャラバンの没落があった上に、一九五四年以降スーフ Souf 地方との交易が激減した。さらに、ジェルダのオアシス群が、土地所有および交易の面で深い関係をもっていた遊牧民または半遊牧民は北方のネメンチャ山地からの種族であったが、⁽¹⁸⁾国境がネメンチャとジェルダとを切り離した。ジェルダは、伝統的生活様式の空間組織がアルジェリアとの国境によって破壊され、サハラからも「地中海」からも切り離された地帯になったのである。

(1) 地域の自然条件に関する記載は、H. Schiffrers, *Die*

Sahara und ihre Randgebiete Darstellung eines Naturprogrammes, IFO-Institut für Wirtschaftsforschung München Afrika-Studien 60 Physiogeographie, SS. 674, 62 Regionalgeographie (Die Landschaft) SS. 756 München 1973 によった。

(2) 四世紀にはトモールに聖アウツスチヌスが短期間でありながら滞在した記録があり (E. Gilson, *Introduction à l'étude de St. Augustin* Paris 1929) 四三〇年にはネンタの司教レトゥスがウマンタルの侵入の折殉教した。

(3) R. Chevallier, *La centuration et les problèmes de la colonisation romaine Étude Rurale* 1961 n° 3 p. 77.

J. Despois, *Sahel et Basse Steppe, Étude Géographique*,

Publication de l'Institut des Hautes Études de Tunis

Section des Lettres, Vol. I, Paris, 1955 p. 111—113, 133,

F. Castagnoli, *Le ricerche sui resti della centuriazione*,

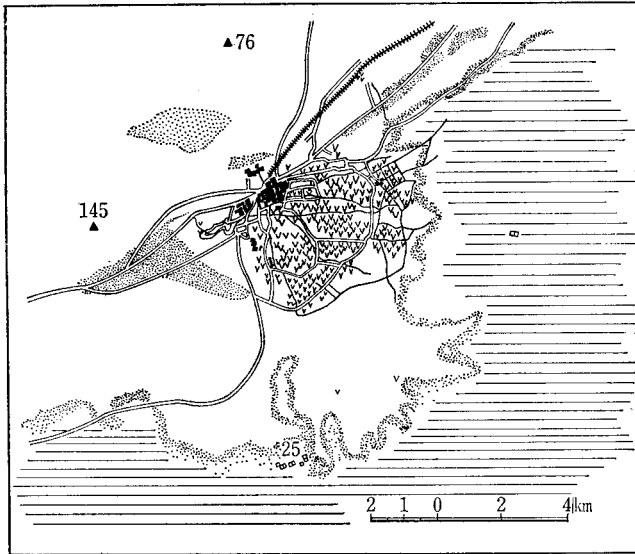
Roma 1958 p. 28—29 さらに、私自身は、航空写真の購

入の許可がどうしても得られなかったので、チュニス大学地理学教室で航空写真の検討をおこなってこの確認をおこなった。この他にも、一九六四年と一九七二年の二度にわたるチュニジア滞在中、A. Kassab 教授をはじめチュニス大学地理学教室の方達には大変お世話になった。ここに謝意を記しておく。

(4) J. Despois, *Les paysages agraires traditionnels du Maghreb et du Sahara septentrional*, *Annales de Géog-*

- raphie* LXXIII 1964 p. 169—170
- (5) この4人の立場からチャリビンをどのように扱った代表的な研究として J. Poncet, *Le sous-développement vaincu? Italie-Tunisie-Roumanie* Paris 1970 pp. 286 及びチャリビンを参照。
- (6) J. Despois, *La Tunisie, Ses régions*, Paris 1961 p. 65
- (7) 遊牧と定着農業との関係については拙稿「定住化——生活様式論として」一橋論叢 第六十一巻 一九六九年 二六頁を参照。
- (8) H. Mensching, *Tunisien, Eine Geographische Landeskunde*, Wissenschaftliche Länderkunde Bd. I, Darmstadt 1968 S. 201
- (9) 今世紀になつてから、ヨーロッパ人の農園(*domaine*)に代つて四つのオオカラがはられた。それぞれにヤマシムに代つてはオオカラは伝統的な灌漑技術としては存在しなかつた。(J. Poncet, *Paysages et problèmes ruraux en Tunisie*, Publication de l'Université de Tunis, 3^e Serie Vol. VIII Paris 1963 p. 280)
- (10) J. Despois, *Les paysages agraire*……op. cit. p. 167
- (11) J. Berque, *Le Maghreb entre deux guerres*, Paris 1962 p. 57 J. Poncet, *La colonisation et l'agriculture européennes en Tunisie depuis 1881. Etude de géographie historique et économique* Paris-La Haye 1962 p. 97
- (12) この問題に関しては、J.-M. Verdier, P. Desanti et J. Karila, *Structures foncières et développement rural au Maghreb* Travaux et Recherches de la Faculté de Droit et des Sciences Économiques de Paris. Série "Afrique" No. 4 Paris 1969 p. 10—13, 23—32 86—90 93—101 J. Poncet, *Le sous-développement vaincu?* op. cit. p. 137—185 原口武彦「チャリビンにおける農業改革——農業生産協同組合に関する一考察——」マシニア経済 第十巻 一九六九年第二号 四三—六〇頁「ケン・サラアの失脚とその後のチャレニシア農業」アジア経済 第十三巻 第七号 一九七二年 八五—九四頁 藤井宏志「北アフリカの農業改革——アリシマリアの自主管理農場とチャリビアの農業生産組合農場——」人文地理 第二十三巻 第三号 一九七一年 四〇—五八頁 E. Makhlouf, *Les coopératives agricoles en Tunisie: structures et difficultés. Revue Tunisienne de Sciences Sociales* 8^{ème} Année No 26 1971 p. 79—114 を主として参考にした。
- (13) J. Poncet, *La Colonisation et l'agriculture* op. cit. p. 359—376
- (14) J. Poncet, *Paysages et problèmes ruraux* op. cit. p. 290—291
- (15) H. Mensching, *Tunisien* op. cit. S. 212—214
- (16) この2つについて J. Despois, *Les paysages traditionnels*……op. cit. のなかで小規模のものを指摘している。

トゼール概略図



-  市街地
-  道路
-  鉄道
-  水路
-  塩採取地
-  砂丘地帯
-  果樹園および菜園

「サハラのアアシスと農業——Tidkelt の場合——」アフリカ研究 第二号 一九六五年 一六一—四六頁)

(17) このことを J. Poncet, *Le sous-développement vancu* op. cit. または E. Makhlouf, *Les coopératives agricoles*, op. cit. などでは「きりと指摘している。とくに「一九七一年のマクルフの論文を、彼が一九六七年十月、マツレン地理学会議 (Colloque de Géographie Maghrébine) でおこなったかなり楽観的な報告 (E. Makhlouf, *La Modernisation de l'agriculture en Tunisie Revue Tunisienne de Sciences Sociale*, 5^{ème} Année N. 15 1963 p. 17—53) と読みくらべてみるならば、ホンヤのチャニシマ農業改革に対する手きびしい評価も不当なものでは決してないことがわかる。

(18) J. Despois, *La Tunisie*, op. cit. p. 67 ネメンチャ山地のロマンスは、その移動範囲が急速に小さくなりつつはあるが、現在でもアルジェリア領内でもこなわれてい^る。(H-G. Wagner, *Das Siedlungsgefüge im südlichen Ostalgerien (Nemenchä)*, Genese eines zentralörtlichen Systems seit Beginn der Selbstverwertung bis in die Postkolonialzeit. *Ervahrung* 25, 1971 S. 118—135.)

三

ジェリドの真珠ともいわれ、ジェリド地帯の行政的中心であるトゼール(人口一・二万)のほかには、この地帯には、ネフタ

(人口一・五万)、およびエル・ウディアス・オアシスに属する五つの村(人口総計七千)、基本的にはフランス人による穿井によって作り出されたといえるエル・ハンマ・オアシス(Hamma)の三つの村(人口総計三千)などの集落がある。オアシス集落の盛衰は歴史的にみればかなりはげしい。トゼールは、十六世紀のコレラの流行までの二百年、奴隸交易およびイスラム文化の中心として、約十万人の都市として繁栄していたことが、アラブおよびトルコ語の記述などから知られているが、現在のトゼールにそのような大都市の跡を見出すことはまったく不可能である。地形条件からみておそらくは、現在の市街地、鉱山鉄道の終着駅の北側にまですつと市街地がひろがっていたであろうということ、オアシス耕地が、現在よりもずつと南方および東方、現在はショットになつてしまつてゐるところまで拡大してゐたであろうことが想像できるだけである。別の例をあげればショットをはさんで対岸のネフザウアのオアシス群の大半は、この数十年間に形成または発展したものであり、他方、エル・ハンマの北方にあるチェビカ(Chebika)タメルザ(Tamerza)のオアシス集落は、ネメンチャ山地との交通路が国境によつて遮断されたために、この二〇年ほどの間に、居住がすっかり放棄されてしまつたのである。

商業および行政中心としての現在のトゼールの機能は決して大きくない。行政、教育に関してはたしかに地域の中心で、白人および白人起源の帰化人数もジェリドで最も多い(約九〇人)が、エク・シヤバ広場およびブルギバ通りに、ジェリド地

帯全体を商圏にもつと考えられる商店が一ダースほどあつても、大部分の商店の商圏はトゼールにかぎられる。商人の大部分は、商業活動による収入よりも地代収入に多く依存してゐる。十数年前ほど前までは、ナツメヤシの収穫期にはトゼールに多くの遊牧民がキャンプして、交易および地代の徴収をおこなひ、トゼールの市場は彼らでにぎわつたさうであるが、現在、トゼールを定期的におとすれる遊牧民の数は非常に減少した。

農産物の出荷は、多角経営協同組合の活動およびチュニスへのトラック輸送の発達のため、各オアシスから直接チュニスに運送されるようになり、トゼールが中心都市の役割をはたして、これがガベスやスファックスと結びつくという体系は崩壊した。これはファクファク(M. Fakhk)がスファックスについて指摘してゐるように、チュニアの地方的中心一般にみられる中心的商業機能の衰退という一般的傾向に対応するものである。

トゼールのオアシス耕地の水源は十二ヶ所の湧水と六ヶの鑽井で、ここから得られる毎秒約七〇〇リットルの水が一〇五〇ヘクタールの耕地をうるおしてゐる。植民地時代、用水路・排水路の整備はかなりなされたが、新たにほられた鑽井は三つにすぎない。オアシスの東部には野菜畑がいくらかみられるが大部分の耕地はナツメヤシ畑で、ナツメヤシの間に、無花果、杏子など多種類の果樹がすこしずつ植えられてゐる。オリイブも、すこしではあるがなほないわけではない。ナツメヤシのなかで特に商品価値の高い品種である *de stat en noir* はトゼールの特産物であるが、この栽培は大農園にかぎられてゐる。デポアの報

告するところによると⁽²⁹⁾一九五〇年代末トゼール・オアシスのナツメヤシの約三分の一は六〇人によって所有され、この中には大規模な白人所有地のものもふくまれていた。この他に、全耕地の約一〇パーセントをしめるイスラム教団 Zaouya Tidjaniya の広大な所有地がある。一九七二年現地で確認しえたかぎり、この状態は殆ど変わっておらず、大規模なコロンの所有地 (Domaine) も、所有主がチュニジア国籍をとってそのままである。大部分の直接耕作農民の所有規模はナツメヤシ一〇〇本以下で、五〇本以下という農民も多い。このような農民の直接経営耕地は、全耕地面積の八パーセントをしめるにすぎないが、この比率として、ジュリド地帯の他のオアシスに比べればまだ高い方である。

水利の私有化を通じて、土地の灌漑耕地 (bled, sequia) 化がなされ、伝統的土地所有形式としてメルク (melk) が成立していた⁽³⁰⁾ジュリド地帯においては、前世紀末までに、さまざまな義務を負わされた分益小作 (charka) 体制が成立していたのであるし、現在においてもシェリクがオアシス住民の大部分を占めている。シェリクの契約内容は、同じトゼール内においてもかなり多様であり、また彼ら自身、耕地の一部を水利権とともにさらに分益小作にだすこともあるし、農業労働者として、分水堰の見張りや農作業に従事することもある。ハムサ (kham-sa) という言葉は、農民がそれを用いるときは、メンシンクヤボンセの言うような厳密な意味、すなわち封建的ハムサット制に由来する分益小作農、したがってトゼールにおいては、遊牧

民が土地所有者であるような分益小作農にかぎって言われているわけでは必ずしもない。むしろ分益小作農一般を意味しているが、ただ「シェリク」という概念とちがって「ハムサ」という概念は水利権または用水管理権とは無関係である、あるいはそれをふくんでいない。このような広義でハムサという言葉が用いられているのは、サハラ・オアシスに一般的であるようである⁽³¹⁾。

トゼールの水路網は、三つの幹線が七つの主要支脈に分れ、それが耕地の中に小支脈として分れていく形をとっている。分水点に設けられている分水堰はセメントで区切りが固定されているが泥でその幅を調節して配水を調節する。一九五〇年代までは大土地所有者からなる水利組合の評議会 myad があったが、現在は、耕区ごとの水利利用者の代表からなる評議会が用水配分の最高決定機関である。配水の単位は時間であるが、その根拠は、銅製の水槽ではかられる水量であり、この基本単位はほぼ四〜五分間の給水に相当する。一週間を単位にして定められたスケジュールにしたがって、複数の関係農民が夜となく昼となく、給水時間中は泥を複雑にぬり固めて流水量を調節した分水堰の見張りにあたっている。

分水堰の見張りが、トゼールでは、他のオアシスに比して特にもものしいのは、耕地面積（正確に言えばナツメヤシの本数）に比して用水の絶対量が不足がちであるからである。サハラにおける平均的必要用水量が、一ヘクタールのナツメヤシ耕地に大体毎秒一リットルであることから、トゼールにおいて、

用水の絶対量の不足、その当然の結果として、用水路末端部に
おける塩分の堆積が深刻な問題になっていくことがわかる。

- (19) J. Poncet, *Paysages et problèmes ruraux*……op.
cit. p. 354
- (20) 奴隸交易は十九世紀末、トランス・サハラ隊商路が衰
退するまでやかんであった。(J. Despois et R. Raynal,
Géographie de l'Afrique du Nord-Ouest. Paris 1967.
p. 430—431)
- (21) K. Schubarth-Engelschall, *Arabische Berichte mus-
limischer Reisender und Geographen des mittelalters über
die Völker der Sahara*. Abhandlungen und Berichte des
Staatlichen Museums für Völkerkunde Dresden Bd. 27,
1967 S. 59
- (22) シェリドおよびネフザウスのオアシス群のオアシスの
排水がすべて流入するシェリド鹹湖の形成は人類居住の歴
史と無関係であるはずがない。
- (23) J. Poncet, *La colonisation et l'agriculture euro-
péennes*……op. cit. p. 362—363
- (24) 聞きとりおよび他のオアシスの観察からこのように判
断した。多くは、チヒリスの商会、あるいは国際的に名の
知られているメーカーの代理店である。
- (25) スファックスからトゼールまで来ている鉱山鉄道は、
毎夕一回貨客混成列車がスファックスから到着して、真夜
中にスファックスにむけて出発する。現在ではトゼールか

らの鉄道による貨物輸送はほとんどない。

- (26) M. Fakhakh, *Evolution des relations de Sfax et
de sa région*. *Revue Tunisienne de Sciences Sociales*
5ème Année N. 15 1968 p. 263—273
- (27) 水源は六〇〇ともしわれ、湧水帯をなしているのが正
確に水源の数をかぞえることはできなすが、大きく十二ヶ
所に分けられている。H. Attya, *L'or-
ganisation de l'oasis*. *Cahier de Tunisie* n° 17—15 1957
p. 39—43. ※参照。
- (28) その導入が比較的新しく、またナツメヤシ一本あたり
の課税額が他の品種に対して高くなっているのだから。
- (29) J. Despois, *La Tunisie*, op. cit. p. 66—67. ナホン
の報告するトゼールに関するデータは、大部分現地におけ
る聞きとりによるもので、官庁統計によるものではない。
データのリータをメンシングとその著書引用してらる。
(H. Mensching, op. cit. S. 213—214)
- (30) ナンヤの「melk」 véritable. シラウドル。
(J. Poncet. *La colonisation et l'agriculture europé-
ennes*……op. cit. p. 50—51)
- (31) H. Mensching, op. cit. S. 213. J. Poncet, *La coloni-
sation et l'agriculture européennes* op. cit. p. 65—70
- (32) ナンヤ P. Estoges, *L'irrigation dans l'oasis de
Laghouat*, *Traavaux de l'Institut de Recherches Sahari-
ennes* Université de Alger. Tome XXIII 1964 1^{er} et

2^e Semestres p. 114 J. F. Chantiron, Aouléf, Problèmes économiques et sociaux d'une oasis à foggaras. *Travaux de L'Institut de Recherches Sahariennes Université de Alger*. Tome XII 1957. 2^e semestre. p. 122-123 における説明がそれである。

四

「ジェリドの真珠」トゼールの経済的・社会的停滞の原因を以上の記述との関連で要約すれば次のようになるであろう。

- (一) オアシス農業の生産関係に殆ど手をふれることのできなかつたチュニジアの農業改革。大多数のシエリク⁽³²⁾の所得水準の低さにもかかわらず、オアシス農業に季節的あるいは一時的就業の機会があることと、彼らがまさに「定着農民」であるため、彼らはステップの遊牧・半遊牧民のように容易にチュニシスの bidonville に流入しないし、また燐鉱山や大都市に出稼ぎに出かけても、また戻ってくる傾向が強い。これとて、現在のチュニジアの体制の下では、所詮、不完全就業の場所または部門がチュニスになるか農村になるか、第三次産業になるか第一次産業になるかというちがいにすぎないことも事実である。
- (二) サハラにおけるオアシス農業の相対的停滞という一般的傾向。これは隊商交易との結合、遊牧民との交易の衰退という一般的傾向によるものであるが、トゼールにおいては、アルジェリアとの国境への近接という条件がこれに加えられなければ

ならない。この問題の解明のためには、オアシス農業と商業との関係、トゼールの居住地区にみられるセグレグーション⁽³³⁾の起源、周辺遊牧民が、交易、土地所有を通じてオアシス生活にどのような役割をはたしていたのか、という点についてさらに研究をふかめる必要がある。

- (三) 技術的条件。これは各オアシスによって異なるし、それに対する対策が何故たてられないかという社会的・政治的次元の問題と当然のことながら関係することである。塩分の堆積の問題は、トゼールでも生じているが、アルジェリア・サハラの多くのオアシスにおけるほど問題は深刻ではない。より重大なのは用水の絶対量の不足である。ネフザウア・オアシス群においてみられる砂丘の移動の脅威はここではまったくない。しかし、技術的条件として、さきの(一)の問題とも関連して、マグレブ諸国における農業発展のための技術的努力が、もっぱら耕地面積の拡大におかれていたことを指摘しておく必要がある。オアシス農業は、地中海農業とは別の技術的方向での生産力発展の可能性をもつものであるという基本的認識がそこでは必要であろう。

(33) 統計的に確認したわけではないが、インタヴューした結果、そのような事例が多かった。勿論これには、私がインタヴューしえたのが、フランス語を話す相手に限られていたという条件を勘案しなければならない。

(34) これについては、J. Despois, *La Tunisie*……op. cit. p. 211-213 における指摘のほか、アルジェリア・リビヤ

に「多くの研究者が注目してゐる。たとへば P. Estorges, op. cit. J. F. Chainton, Aoulet, Problèmes économiques et sociaux d'une oasis à Ioggaras (suite et fin) *Travaux de l'Institut de Recherches Sahariennes*. Université de Alger Tome XVII 1—2 semestre 1958 p. 127—156. H. Eldblom, Quelques points de vue comparatifs sur les problèmes d'irrigation dans les trois oasis libyenne de Brâk, Ghadamès et particulièrement de Mourzouk, *Lund Studies in Geography, Serie B Human Geography*, n° 22 1961 (Svensk Stud. in Geogr. Årsb. 27. p. 125—145) など参照。

(35) 居住地区と耕区との対応が明らかに確認できる。土地所有関係あるいは人口流入を通じての遊牧民との交渉の歴史は、トベール全体についてはなく、このセクレグーシ

の次の次元で考察されるべきであろう。

(36) A. Tiano, *Le développement économique du Maghreb* Paris 1968 p. 16

後記：この小論をまとめるのにさいしては昭和四九年度文部省科学研究費総合研究A「地中海地域における都市と農村の地域的比較研究」。(課題番号九三〇一〇二) 研究代表者竹内啓一)を利用した。

(一橋大学教授)